

大学における課外活動の意義に関する教育学的検討

中山 弘之*

はじめに

大学において学生が様々な力量を発達させる場としては、まず教育課程に位置づけられている正課の授業が指摘できる。しかし、大学において学生の発達に関わる場はそれだけではない。サークル活動、部活動、行事（大学祭など）、自治活動（自治会・学生会など）、社会的活動（ボランティア・市民活動・社会運動など）などと言った課外活動¹もまた、学生生活において大きな位置づけを占めており、学生の発達に大きな影響を与えていると考えられる。

教育社会学を専門とする武内清・浜島幸司は、学生の部活動・サークル活動の状況についてのアンケート調査分析を通して、「部・サークル活動は、学生に楽しみを与える効果だけではなく、社会の一員としての私を自覚させる効果も併せもっている」と述べている²。これは、課外活動に位置づけられる部活動・サークル活動が果たす役割の大きさについて指摘したものである。

また教育学・生活指導を専門とする浅野誠は、「合宿、コンパ、懇談会、行事、クラブ活動、同好会活動、自治活動、図書館利用」などについて、「そうしたもののもつ教育力は、大学教育のなかでかなりの比重を占めているはずである」と述べている³。これは、課外活動など授業以外の諸活動が学生の発達に果たしている影響力の大きさを指摘したものである。

確かに、以前より、大学を卒業した者から「大学時代は、授業だけが学習の場ではなく、部活動、サークル活動などからも多くのことを学んだ」という声を聞くことがある。筆者もそうした感覚を持っている一人である⁴。部活動やサークル活動以外では、大学祭実行委員会、生協学生委員会、学生自治会活動や社会的活動から多くのことを学んだという者も多いだろう。

それでは、大学における課外活動は、それに取組む学生にとってどのような意義をもつのであろうか。本稿では、このことについて、教育学におけるいくつかの理論や問題提起を手がかりにしながら検討したい。

1. 人格形成への寄与

(1) 訓育としての性格が強い課外活動

サークル活動、部活動、行事、自治活動、社会的活動などの課外活動の大きな特徴の一つは、これらの活動が集団による組織運営や具体的な実践を伴うことである。つまり、課外活動の活動分野はスポーツ・文化に関わるもの（サークル活動、部活動など）、大学生活の充実に関わるもの（自治活動、行事など）、社会的な問題の解決（社会的活動など）などと多岐にわたるが、そのほと

※愛知教育大学 教育ガバナンス講座

¹ 同様の活動を正課と対応させて「正課外活動」と称する場合もあるが、本稿では「課外活動」と表記する。

² 武内清・浜島幸司「部活動・サークル活動」武内清編『キャンパスライフの今(高等教育シリーズ 123)』玉川大学出版部、2003年、41ページ。

³ 浅野誠『大学の授業を変える16章』大月書店、1994年、167ページ。

⁴ 筆者が大学・大学院在籍時の課外活動を通して何を経験し、何を学んだのかについては、大学評価学会における課題研究で報告したことがある。中山弘之「大学・大学院における課外の自治的活動と青年期の発達」大学評価学会第16回全国大会（神戸大学）・課題研究報告B会場「発達保障」発表、2019年3月。

んどが組織をつくり、構成員の参加のもとに役割分担して集団的に組織を運営しながら、それぞれの活動を具体的に展開している。

こうした特徴を教育学の観点から見た場合、課外活動にはどのような意義を見出すことができるであろうか。

このことを検討する上では、陶冶（とうや）と訓育という教育学の考え方が参考になる。

教育学においては、教育のいとなみには陶冶と訓育という二つの機能があると考えられている。陶冶とは、「知識や技術」を「教授」することを通して「学力を形成する働き」のことをいう。一方訓育とは、「世界観や信念、態度、性格、行動のしかたの形成」を通して「人格形成をはかる働き」である⁵。

学校の教育活動は国語・数学などの教科指導（授業）と学級活動・児童会活動・生徒会活動・クラブ活動・学校行事などの生活指導（教科外活動）の大きく二つに分けることができるが、陶冶と訓育はどちらの活動においても二つの側面として備わっている。ただし、知識・技術の教授を中心とする教科指導（授業）は陶冶を主な役割としており、集団による具体的実践を通じた人格形成を目指す生活指導（教科外活動）は訓育を主な役割としている⁶。

陶冶と訓育という考え方から見た場合、課外活動は、集団による組織運営や具体的な実践を伴うという点で、訓育としての性格を強く持っているのとらえることができる。つまり、課外活動はまず、それに参加する学生の世界観、信念、性格、行動の仕方の形成、すなわち学生の人格形成に大きな影響を及ぼしていると考えられるのである。

（2）課外活動を通じた人格形成

大学における課外活動は、中には大学の教職員などが指導者や助言者として関わっているものもあるが、その多くが学生たちによる自治的活動として取り組まれている。学生たちは、所属する集団の中で、自分たちで活動方針・活動計画などを話し合いながら、役割分担の上で具体的な活動を展開していく。また、時機を見て活動の成果と課題を話し合いながらふりかえり、その後の活動に活かしていく。こうした活動を重ねる中で学生は、組織運営の具体的な方法、組織の中の行動の仕方などを身に付けていく。

もっとも、大学における課外活動の多くは、自治的に取り組まれているがゆえに、組織を運営し、活動を進めていく中では、メンバー同士の意見の対立や人間関係上のトラブルもある。しかし、こうした困難の中で試行錯誤することは、異なる考え方を持つ他者との関わり方を考えるきっかけになるし、また民主的な組織運営のあり方とはどのようなものかについて考えるきっかけにもなる。

発達心理学を専門とする西垣順子は、大学時代における発達課題の一つとして、「対等で異質な他者との関係」を築くことを挙げている。これは、大学入学以前のような「基本的に同性」の「よく似た好みや趣味」を持った者同士の友人関係だけではなく、「異なる価値観、異なる文化、異なるジェンダー」の人との「対等」な関係を築けるようになるかどうか、大学時代において大

⁵ 鈴木秀一「陶冶と訓育」青木一・大槻健・小川利夫・柿沼肇・斎藤浩志・鈴木秀一・山住正己編『現代教育学事典』労働旬報社、1988年、574ページ。

⁶ 柴田義松『教育課程—カリキュラム入門—』（有斐閣、2000年）178-183ページを参照。

きな発達課題となるということである⁷。とすると、メンバー同士の意見対立や人間関係上のトラブルとも向き合いながら組織的に活動を進めていく課外活動は、こうした発達課題に接近し、異なる考え方を持つ他者とも共同できる力を身に付けるきっかけにもなるといえる。

また、課外活動では、活動内容に応じて、大会やコンクールへの出場、活動成果の発表、活動成果の地域社会への公開など、様々な形で現実の社会とのつながりが出てくる。そうした中で、学生以外の社会の様々な人びととの交流も生まれる。自治活動や社会的活動の場合は、活動内容が社会問題と関わりをもつ場合がしばしばあり、活動をきっかけに社会への認識が深まっていくことも多い。

このように課外活動は、社会との関わりを意識しながら行われることが多いため、そこには一定の緊張関係と様々な葛藤や試行錯誤がある。しかし、それに向き合っていくことは、学生が「成長感覚」を得ることにもつながる（この点については後述）。

こうした様々な力量が身に付いていく中で、課外活動に取り組む学生たちは、自己の信念や世界観や生き方を問い直し、深めていくようになると考えられるのである。

2. 認識・技術と人格の統一

(1) 訓育としての課外活動が及ぼす決定的な影響

ここで留意しておきたいのは、課外活動が、正課の授業よりも学生の発達に大きな影響を与える場合があるということである。このことについて、訓育と陶冶に関して先駆的に追究してきた戦後教育学の第一人者・小川太郎の見解から考えたい。

小川は、訓育は、単に陶冶と並ぶものであるだけでなく、「教育全体にとって決定的なもの」と述べている。その理由として、小川は、「教育は……きゅうきょくには知識・技術を使う人格の形成である」ことを挙げている⁸。つまり、集団による具体的実践を通して行われる訓育は、ただ単に人格形成を図るだけではなく、陶冶を通して身に付けた知識・技術を生活に活かすことができる人格形成を図る役割を持つという点で、陶冶以上に重要な役割を持っているということである。確かに、どんなに高度な知識や技術を持っていたとしても、それを生活において実際に実践できなければ、宝の持ち腐れになってしまうであろう。小川の論述は、教育における訓育の決定的な位置づけを指摘した重要なものである。

この小川の考え方に学ぶならば、訓育としての性格が強い課外活動は、場合によっては、大学における正課の授業以上に学生の発達に決定的な影響を及ぼす場合があることが理解されるであろう。課外活動は、集団や現実の社会との関係の中で、活動内容に応じた具体的な実践に取り組むものである。そこでは、小中高や大学での正課の授業などで学んできた知識や技術を活用しながら実践に取り組むことになり、その中で学生たちは、知識や技術を実のあるものにするとともに、様々な実践的な力を身に付け、自己の信念や世界観や生き方を問い直すことになると考えられる。

こうして、課外活動においては、授業その他で身に付けた知識・技術と結びつく形で人格形成が図られると考えられる。

⁷ 西垣順子「青年期教育としての大学教育を拓くための研究課題—発達心理学の観点からノンエリート青年の発達保障と大学教育を考える—」シリーズ「大学評価を考える」第7巻編集委員会編『大学評価と「青年の発達保障」(大学評価学会・シリーズ「大学評価を考える」第7巻)』大学評価学会、2016年、14-16ページ。

⁸ 小川太郎『教育科学研究入門』明治図書出版、1965年、77ページ。

(2) 認識・技術の深まり

小川は、前節で引用した「知識・技術を使う人格の形成」とほぼ同様のことを、「学習における理論と実践の統一」とも表現している⁹。この「学習における理論と実践の統一」について、もう少し検討しておきたい。

先に紹介した浅野によれば、学習には、子どもの「興味・関心の世界」から出発する「遊び」として行う学習と、「必要」、つまりやるべきこととして行う教科的な学習があるという¹⁰。

それが、小学校4年生ごろになると、一方では、「遊び」として行う学習に「一定の継続性系統性」が生まれ、『『専門』的な科学芸術技術スポーツ追求』が始まるという。他方、教科的な学習においても「一定の抽象性」が要求されるようになってくるという¹¹。さらに、中学生や高校生段階以降になると、「遊び」として行う学習が「研究的模索の色彩」（傍点浅野）を帯びはじめるという。つまり、「遊び」として行う学習と教科的な学習に性質的な重なりが生まれてくるということである。したがって、この段階においては、「遊び」として行う学習と教科的な学習をそれぞれ豊かにふくらませると同時に、両者を「交差」させる必要があるという¹²。

浅野は、こうしたことが、子どもたちに「主体的に知的探究しようという姿勢」、「主体的に自ら問題を見出し、理論的に思考していく力量」¹³などを育てる上で重要であるとしている。

浅野の問題提起は、教科的な学習が実生活と遊離している状況を教育する側から解決することを目指して行われたものであるが、本稿との関連で重要なのは、「遊び」として行う学習と教科的な学習を「交差」させる場の一つとして、「クラブ・部」など「教科外の諸活動」を挙げていることである¹⁴。

大学における課外活動も、授業外で行われているものである。したがって、活動したり学んだりする側から見た場合、大学における課外活動は、「遊び」として行う学習と教科的な学習が「交差」することで、主体的に知的探究し、理論的に思考できる力量の発達につながる可能性があると考えられるのである。

確かに、大学の段階になれば、サークル活動・部活動などにおいては活動の質を高めるために、自治活動・社会的活動などにおいてはそれぞれの活動で取り組む課題についての理解を深めるために、文献・資料・インターネット情報などでいわば「研究」的に調べたり、話し合いを繰り返したりする場合があるだろう。その中では、これまでの学校教育や大学における正課の授業などで身に付けてきた知識・技術を駆使するとともに、さらに自己の活動や集団での活動や社会状況を分析しながら、活動に取り組んでいくことになるだろう。また、実際に活動に取り組む中で、さらに活動の質が向上したり、理論的に考える力量が高まっていったり、これまでの認識を問い直したりすることにつながることも多いだろう。

課外活動においては、こうしたことを通して、自分たちが行っている活動についての力量を高めていくとともに、自己や集団・社会などについて主体的に認識したり、分析・総合したりする力をより深めていく可能性があると考えられる。言いかえれば、課外活動は、単に人格形成に影

⁹ 小川、前掲『教育科学研究入門』、138 ページ。

¹⁰ 浅野誠『子どもの発達と生活指導の教育内容論—生活指導は何を教えるのか—』明治図書出版、1985年、229-231 ページ。

¹¹ 浅野、前掲『子どもの発達と生活指導の教育内容論』、232-233 ページ。

¹² 浅野、前掲『子どもの発達と生活指導の教育内容論』、237 ページ。

¹³ 浅野、前掲『子どもの発達と生活指導の教育内容論』、228 ページ。

¹⁴ 浅野、前掲『子どもの発達と生活指導の教育内容論』、233-234 および 237-238 ページ。

響を及ぼすだけではなく、これまでの学校教育や大学での正課の授業で身に付けた知識・技術と結びつきながら「理論と実践の統一」が図られる中で、認識・技術を深いものに発展させる可能性を秘めているといえるのである。

3. 興味・関心・課題にもとづきながらじっくりと活動に取り組むことの意義

大学における課外活動は、自治活動を除いて、基本的に学生それぞれの興味・関心にもとづいた主体的な活動であることが特徴である（自治活動の場合も、大学生生活の充実への関心から、自ら主体的に活動に入っていく場合があるが）。

また、課外活動は、時間的な制約から相対的に自由であるため、正課の授業と比べるとじっくりと活動に取り組むという特徴もある。

スポーツ教育学・部活動を専門とする神谷拓は、課外の運動部活動の利点について、教育課程の活動が「限られた時間内で効率的に行う必要」（傍点神谷）があるのに対して、課外の運動部活動は教育課程のような「時間的な制約」から「解放」されるため、時間をかけて活動に取り組むという利点があると述べている¹⁵。このことは、大学における課外活動にもおおむね当てはまるといえる。

したがって、大学における課外活動では、学生自身が興味・関心を持っている活動に意欲的かつ主体的にじっくりと取り組むことができるといえる。自治活動の場合も、学生自身の大学生生活上の課題について、じっくりと取り組むことができる。こうしたことの意義は大きいと考えられる。

まず、先に課外活動は、人格形成の上でも認識・技術の深まりの上でも、双方の統一的な発達の上でも大きな意義があることを述べた。こうしたことも、学生自身の興味・関心・課題にもとづきながら、じっくりと活動に取り組むことと大きく関係していると考えられる。

また、先に紹介した武内・浜島は、アンケート調査から、大学における部活動・サークル活動に力を入れて取り組んでいる学生について、「現在、打ちこむ活動をみつけて、実際に活動することによって「自己意識」を高めることができていると分析し、このことを部活動・サークル活動の「潜在的効果」と述べている¹⁶。こうしたことも、興味・関心のある活動にじっくりと取り組むことと大いに関係していると考えられる。

さらに、意欲的・主体的にじっくりと活動に取り組んでいる場合、活動の過程で様々な葛藤・困難や試行錯誤があっても、そうしたことに主体的に向き合うことができる。葛藤・困難などに主体的に向き合うことは、「成長感覚」を得ることにつながる。こうした「成長感覚」は、学生のその後の人生においても大きな意味をもつと考えられる。

このことに関して、教育学を専門とする乾彰夫は、東京における高校卒業者の追跡インタビュー調査（共同研究）を通して、若者が大人へと移行していく上では、「困難を自分たちだけの力でやり切ったという体験」を通して「一つ成長したと強く感じられる、そんな経験と感覚」を得ることが重要であることを指摘している。そして、こうした「イニシエーション的経験」（乾はこのことを「成長感覚」とも称している）が、その後の若者が「次の体験を豊かにする上での糧」

¹⁵ 神谷拓『運動部活動の教育学入門—歴史とのダイアローグ—』大修館書店、2015年、288-289ページ。

¹⁶ 武内・浜島、前掲「部活動・サークル活動」、36-37ページ。

になるとしている¹⁷。また、この共同研究では、教育学を専門とする児島功和が、大学に進学した若者へのインタビュー調査を通して、大学における「自治的活動としての課外活動」が若者の「成長感覚」の獲得に大きな役割を果たしていることを明らかにしている¹⁸。

4. 自治と民主主義の主体形成のきっかけ

先述のように、大学における課外活動は、その多くが学生たちによる自治的活動として取り組まれている。高校までの課外活動（例えば部活動）にも子どもの自治を尊重したものがあるが¹⁹、現時点では主流になっているとまではいえないだろう。したがって、大学の学生の多くは、大学における課外活動においてはじめて、上からの指示ではなく、自分たちの力で組織を運営しながら活動する経験をするようになるだろう。

したがって、様々な困難を乗り越えて活動の目標を達成した時の喜びは大きく、学生たちはその経験から大きな自信を得ることにつながる。また、自分たちの力で取り組んでいるからこそ、活動の中で見えてくる成果や課題も、自分たち自身の成果・課題として受けとめることができる。こうした喜びや成果・課題の実感、課外活動に取り組む学生たちにとって、自治的に行動することの喜びや意義を実感するきっかけとなるであろう。

また、学生たちは、自治的な課外活動を通して、組織運営の具体的な方法、組織の中での行動の仕方などを身に付けていく。さらに、活動を進めていく中で生じ得るメンバー同士の意見の対立や人間関係上のトラブルは、異なる考えを持つ他者との関わり方、民主的な組織運営のあり方、さらには民主主義とは何かについて考えるきっかけにもなるといえる。

こうして、大学時代に課外活動を通して、自治の大切さを実感しながら、自治的・民主的な組織運営や行動の方法、異なる考えを持つ他者との関わり方や民主主義のあり方について考える経験の積み重ねは、大学卒業後の社会における生き方にも大きな影響を与えるだろう。

学生たちは大学卒業後、職場、家族、地域社会など様々な場において生活することになる。中には、自らの趣味や興味・関心にもとづくサークル活動、市民活動、ボランティア活動、労働組合、政治的活動、地域づくりなどに参加したり、こうした活動を自ら立ち上げたりする者もいるだろう。こうした様々な場の多くは、組織の中で集団的に行われる。したがって、課外活動を通して自治や民主主義について考え、学んだ経験は、卒業後の社会における様々な場において、自治と民主主義の主体として生きる基礎を培う上でも大きな糧となる可能性があるといえる。

むすびにかえて

これまで検討してきたことを踏まえれば、大学における課外活動は、興味・関心・課題にもとづきながらじっくりと活動に取り組むことを通して、単に人格形成に影響を及ぼすだけではなく、これまでの学校教育や大学での正課の授業で身に付けた知識・技術と結びつきながら、認識・技術を深いものに発展させる可能性をもっていること、また、自治と民主主義の主体形成のきっか

¹⁷ 乾彰夫「若者たちの七年の成長と自信」乾彰夫編『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか—若者たちが今〈大人になる〉とは—』大月書店、2013年、352-362ページ。

¹⁸ 児島功和「若者は大学生活で何を得たのか？—大学生活の構造とその意義—」乾、前掲『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか』、258-265ページ。

¹⁹ 例えば、堀江なつ子「運動部活動の実践」神谷拓編著『対話でつくる教科外の体育—学校の体育・スポーツ活動を学び直す—』（学事出版、2017年）。

けになり得ることが理解されるであろう。このように、大学における課外活動は、大学生生活の充実・発展や学生の発達に向けても、さらには大学卒業後の人生や社会の充実・発展に向けても、大きな意義と可能性を秘めていると考えられる。

ところで、哲学を専門とする望月太郎は、シティズンシップ教育について解説した論稿の中で、「自治会活動やサークル活動を含む課外活動」が「いわゆるシティズンシップ教育において担ってきた役割を看過することができない」とし、「学生が、正課の学習においては希薄になりがちな社会との関係を築き、自らの〈市民〉としての存在意義のあり方を自問するのは、むしろ課外活動においてであった」と述べている²⁰。望月はシティズンシップ教育の観点から課外活動が学生に及ぼす影響力・教育力の大きさについて指摘しているが、望月の場合は、課外活動の方が正課の授業以上に影響があると述べている。これは、こうした感覚をもっている大学卒業者が多いことの反映であろう。

大学において課外活動を経験した者がこうした感覚を持つようになるのは、これまで検討してきたように、大学における課外活動が自治的に取り組まれていること、興味・関心・課題にもとづきながらじっくりと活動に取り組めること、訓育としての性格が強く人格形成に大きく寄与すること、その中で自己の信念や世界観や生き方の問い直しにつながることで、社会とのかかわりがあること、訓育が陶冶以上に決定的な影響力を持っていること、これまでの教科的な学習などで身に付けた知識・技術と人格形成とが結びつきながら認識・技術が深まる可能性があること、活動における葛藤や試行錯誤が「成長感覚」を得るきっかけになること、自治や民主主義の大切さ・方法・あり方などについて考えるきっかけになることなどが関係していると考えられる。

今後は、本稿での検討から浮き彫りになってきた大学における課外活動の様々な意義について、実践分析や調査研究などを通して検証することが求められる。

ただし、注意しておきたいのは、大きな意義があるとはいえ、現実の大学における課外活動は、活動のプロセス、活動組織の内部、指導者・助言者と学生たちとの間（指導者・助言者がいた場合）、活動組織と外部・社会との間などにおいて、様々な矛盾・対立を抱えながら進められており、その状態によって、学生にとって望ましい影響を及ぼすこともあれば、望ましくない影響を及ぼすこともあると考えられることである。それゆえ、今後は、大学における課外活動をめぐる諸矛盾を事実に基づきながら析出することを通して、学生の発達につながる課外活動のあり方、さらには課外活動に対する指導・助言や条件整備のあり方を解明することも、大きな課題であるといえるだろう。

²⁰ 望月太郎「シティズンシップ教育」シリーズ「大学評価を考える」第5巻編集委員会編『大学評価基本用語 100（大学評価学会・シリーズ「大学評価を考える」第5巻）』晃洋書房、2011年、3-4ページ。